2020 年 5 月 24 日　　日本基督教団 八ヶ岳伝道所　主日礼拝　　NO.1121
聖　　書　　出エジプト記 24:12~18／コリントの信徒への手紙二 5:1~9
説　　教　『 主のもとに生きる 』　　長崎 哲夫　牧師

創世記のヤコブの子ヨセフが自国の宰相であった歴史的事実を全く知らなかったエジプトの新世代の王ファラオは、イスラエル・ユダヤ人が自分の国を多勢で席巻するのに我慢出来ず、ヘブル人の男子の出産に際しては、その場で息の根を止めよと命じた(出ｴｼﾞﾌﾟﾄ1:16)。
ある時、レビ家の男と同族の娘との間に男子が出生、隠しきれずナイル川の葦の茂みにアスファルトとピッチで防水の籠に入れて隠した。其処へ水浴びに来た王の娘が泣いていた男子を抱き上げた。モーセの名は「水の中からわたしが引き上げた」の意だ(ﾏﾀｲ 3:6)。
長じてモーセは、或日燃え尽きぬ柴の中の「わたし、アブラハムの神・イサクの神・ヤコブの神」との神の声を聞き、神がエジプトから「乳と密の流れる地に導き上る」決心をしたことを知る。「わたしはある」という神の前の最初の礼拝だった(出ｴｼﾞﾌﾟﾄ3:15-17)。

神がイスラエルに「過越祭」を規定すると、人は「イスラエル建国記念日」と言いもしたが、それによって民は神の言葉に一つとされ、奴隷となり隷属したエジプトから解き放たれる望みに立った。人の苦しみからの真の救いは、主の十字架によって完成する(ﾛﾏ 6:6)。
イスラエルは 430 年も住んだエジプトのラメセスからスコトに向けて旅立ったが、その時彼らは壮年男子だけで 60 万人(出ｴｼﾞﾌﾟﾄ12:37)とあるから実際はその 3 倍 4 倍の一大集団で、先頭には神の御使いが立ち、先ず葦の海を渡った。彼らを追って来たファラオの軍は、夜もすがら吹き渡った東風により海が押し返され全軍が其処に沈んだ(14:28)。

モーセが十戒を授与される前からイスラエルは､「荒野の旅路の初めから人の住んでいる土地カナンの境に到着するまで 40 年の間」マナ(16:35)を戴き、更に、人はモーセに対する水不足の不平を述べていたが、モーセは杖で岩を割り「マサ」(17:7)で彼らを潤した。
所謂「モーセの十戒」は、やがてイエス・キリストが「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして汝の神を愛せ」と「隣人を己のように愛せ」(ﾏﾀｲ 22:37)として、サドカイ派やファリサイ派に留まらず、今日の世界全体に向けた大きな呼びかけ、福音となる。

「聖書の山」は神いまし給い、人と出会う場。モーセは最初と 2 度目の登攀で民の聖別の備えをし、それをもって(出ｴｼﾞﾌﾟﾄ19:23)十戒授与(20:1-17)した。時に民は「神を見て恐れ、遠く離れて立って」神が直接ではなくモーセがみ旨の取り次ぎ手となることを乞うた(20:19)。
民は､「試す神」を畏れたが、モーセは密雲煙る山に留まり、神と人との契約を民に具体的に知らせるため、神と民の間に「血の契約」(24:8)に入らせ、３－４度目のシナイ山登攀の合間に神の言葉の遵守を民に強く勧め、民は和解の雄牛の血で赤くなり応じた。

4 度目の登攀中(24:12-32:15)、モーセの下山遅延に民は雄牛の像を刻み、踊った。これに怒ったモーセは契約の板を破砕し(32:1９)、雄牛の像を粉砕した。この日レビ人は自分の兄弟・友・隣人 3 千人を滅ぼし、宿営の入り口で主の贖い人として祝福された。
神と民との間に立つモーセの忍耐と練達はしばしば打ち砕かれるが、この間 5 度目の登攀(34:4-29)に於ける主要な内容は、「安息日」と「幕屋」建設にある。
安息日は創造物語の再確認。幕屋は移動する度に再建された祈りの場。これがある故にイスラエルの荒野の旅は整えられ、雲が幕屋を離れて昇れば、イスラエルは荒野へ出発できた(40:36)。